

#662 最後の審判と携拳

—個人的終末論—

ヘブル人への手紙 9章 27~28節

東住吉キリスト集会 高原剛一郎氏

皆さま、こんにちは。暑いですねえ。1か月ほど前、私は東京メトロの有楽町線に乗って、麴町駅に向かっていました。空いてたので座ってたんですが、40代くらいの女性が来られて「必ず読んでください」って、私にメモを渡したんですね。彼女はすぐに降りて去って行ったんですが、ファンレターかなと。開いてみたら、「チャック開いているかもしれません」と書いてあったんです。パッと見たらね、「かもしれません」どころの話じゃないんですよ。全開！ほんでもう、いたたまれなくなってるね。恥ずかしい…。だけどね、その人に感謝してるんです。

麴町は各国の大使館が集まっている所で、私はある国の大使と対談するために行っただんです。もしその指摘がなかったら、なんぼエエこと言っても、チャックおっぴろげてですよ、これはダメですねえ。つまり、私がある重要人物と出会う前に、整えのためにとても良いことを教えてくれた。でも、その良いことは、実は耳が痛いことだった。

聖書を読むと、読むだけで励まされるどころ、読むだけでウツリするところもあるんですが、同時に、読んでいる人を辱めるといふか、惨めにするといふか、非常に耳が痛いことをズバリズバリと語っている箇所があります。しかし、聖書が私たち人間の問題点を指摘する時、それは軽蔑心から出たことではなく、愛から出ていることばなんです。決定的に重要な場面に立つ前に、そこに行かないですむように身を整える、そのために語ってくれている福音なんですね。

今日は「最後の審判」と言われている箇所をご一緒に見ますが、まず大前提は、聖書の神は私たちを愛してくださっている方です。神はあなたを愛しておられる。神はあなたの創り主、作者だから。もし神があなたを嫌いなら、そもそも創ってません。あなたにいてほしい、存在してほしいと思えばこそ、あなたを創られた。人が作った神々ではなく、人を創った神。「が」と「を」の違いは大きいですよ。

ある大手薬局チェーン店に勤務されている方が言ってました。高校生くらいの男の子がカウンターに来て「母の命下さい。」「えっ？ああ！」と、命の母Aを渡したと。命の母Aは小林製薬が作った大ヒット商品で、今、紅麴でずいぶん叩かれている小林製薬、何で大会社になったという命の母Aです。これは女性の更年期の症状を抑えるための薬で、今でも売れてる。お母さんに「買って来て」と頼まれたんでしょうが、ちょっとうる覚えでね、「母の命下さい。」

「お命頂戴します」って、ヒットマンが言う台詞じゃないですか。一文字入れ替わるだけで全然意味が違う。

もっと違うのが、「人が作った神々」か「人を創った神」なのか。人が作った神々が、人を助けることができるはずがない。

しかし、人を創った神は作者なので、作品である人間の欠陥や、どの部分をどう直せばよいのか、人が自分のことを分かっている以上にご存知です。耳が痛いことではあるけど、究極の祝福に導くために、非常に言いにくいことをズバリ語ってくださっている。その箇所をご一緒に見ましょう。

ヘブル人への手紙 9 章

27 そして、人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっているように、

28 キリストも、多くの人の罪を負うために一度ご自分を献げ、二度目には、罪を負うためではなく、ご自分を待ち望んでいる人々の救いのために現れてくださいます。

ここには 4 つの定まっていることが紹介されています。

①人は一度死ぬ ②死後に裁きを受ける ③メシア預言に基き、イエスは十字架にかかって死んでくださった（歴史的事実） ④携拳。世の終わりの時、イエスはこの世界からクリスチャンたちを救い、迎えてくださる。再び来られる。

今日はこの 4 つの定まりに注目したいんですね。というのは、定まってるって書いてあっても、意図的に考えないなら、聖書のメッセージが分からなくなるんです。なので、順々に見ていきます。

①人間には、一度死ぬことが定まっている

今の社会は、死というものが視野に入って来ないように仕向けるシステムが働いているんじゃないかと思うんですね。

私は 6 月の 1 か月間ヨーロッパに行って、ドイツのフランクフルトからパリまで、ヨーロッパ特急電車で移動しました。フランクフルトは始発駅で 13 両編成ですが、13 号車が無いんですよ。1 号車 2 号車…11 号車 12 号車 14 号車。13 が無い。なんで？不吉やから。日本人と一緒にや！

日本人は 4 をものすごく嫌う。飛行機のボーディングシート、4 は無いですよ。1・2・3・5 です。4 は死を連想する。だけど、4 番シートの底だけ抜けるっていう被害、難しいんじゃない？死なば諸共じゃないですか。天王寺にある大阪市立大学附属病院。4 階に病室がない。手術室。もっと怖いわ。いや、4 とか 13 とかそんな関係ないけど、とにかく死を連想させるものは、できるだけ遠ざけて考えないようにしよう。だけど、一度死ぬということにちゃんと向き合っていくのは、福音を理解するのに必要なことなんです。

あるところに、中高6年一貫教育の女子校がありました。そこの中学3年生のEさんは元気で明るく活発なクラスの人気者なのですが、どうも最近疲れやすい。近くのクリニックで診てもらったけど分からない。それで、大病院で精密検査をした結果、内臓に末期癌が見つかったんです。まだ14歳。若いと癌細胞の分裂も早く、どんどん進行する。ドクターはすぐに両親を呼んで告知しました。「娘さんは末期癌です。現代医学ではどうしようもありません。」

両親は、このことを娘には言わないと決心したんです。「入院もしません。家に連れて帰ります。家で療養します。」家で療養たって、できることは何もないんですよ。「良くなるから。良くなるから」と言って、だけど、どんどん痩せていって。「お母さん、私もうダメなんじゃないの?」「何を気弱なこと言ってるの!」

お父さんは娘の耳に変な情報を入れたくないということで、学校に行って担任に、「ちょっと今、体調悪くて。良くなったらまた行かせますんで、しばらく休ませてください。」「娘さん、何か病気ですか。」「ちょっとね、あんまり言えない病気なんですけど、良くなったらすぐに行かせますから。」親がそう言ったので、担任はクラスメートにそのまま伝えたんです。「ずいぶんしんどいから、お見舞いも控えてと言われてた。」

Eさんは2か月後に亡くなりました。みんな「すぐ学校に戻るだろう」と思ってたのが亡くなったと聞いて、もう大ショック。クラス全員でお葬式に出たんです。14歳15歳の柔らかい心ですよ。ショックで、始まる前から、皆すすり泣いている状況でした。

その地域には風習があって、子供が親よりも先に死んだ場合、母親は火葬場に付いて行ってはならないんです。お母さんは娘を霊柩車に乗せて見送ったら、次は骨壺の骨しか見ることができない。このお母さんは、それがどうしても受け入れられなかったんです。パニックを起こしたんです。数人の男性が棺を抱えて霊柩車に運んで行く時、男性の間に割り込んで、棺にしがみついて、「やめて!この子を連れて行かないで!」もう半狂乱。ようやく男性の力で羽交い絞めにして、無理やり引き離して、やっと火葬場に行くことができた。クラスの女の子たちが皆、それを見てたんです。

それからクラスが変わったと言うんです。次の日から変わった。何かと反抗的な生徒が多いクラスだったんですが、妙に素直になった。そして、特定の子を虐めるグループがその子に、「赦してください。今まで辛く当たってごめんね」と謝ったり、まとまりのないクラスだったのが、どんどん団結するようになった。

担任は「Eさんの葬式を見て、大きな影響を受けたと思います。みんな彼女の中に自分自身を映し出したんじゃないか。自分を重ねて見たんじゃないか。」あんなに元気ですぐに戻って来ると思ってた人が、次に会ったのは葬式の会場で、遺影で見てるだけ。ありがとうもさようならも、お別れのひと言も言えないままに

終わってしまっ。

そして、お母さんのあの半狂乱の姿を見た時、死というものがどんだけ残酷か。親切にできるのは、その人が生きている間だけ。その人が亡くなってしまったら、後で「あの時、ごめん言えばよかった」「ありがとうって、なぜひと言言わなかったんだろう」となんぼ言ってもムダ。今生きている間だけが、その人とい関係結ぶことができるチャンス。だから、命のある限り大事にしたい。仲間を。

いつ死ぬか分からないという現実と向き合った時、生きていることは当たり前じゃなく、生かされている。

死というものを全く考えなくなると、人間って増長しませんか。自分が全能者になったような。私たちはみな死につつあるんですよ。死と真摯に向き合っていく…。

人間には、一度死ぬことが定まっている。当たり前のことを、なぜわざわざ書いたのか。定まっていることについて、日頃考えていない。考えないようになってしまった、というのが大きいんではないかと思います。

②死後にさばきを受けることが定まっている

「人間死んだらゼロ。人は死んだら無になる。唯物論。死後の世界なんか無い」と言う人もいますが、聖書の神はそれを全否定します。

死後に受ける裁きは最後の審判です。最後の審判という言葉は、聖書には出て来ません。聖書は白い御座の裁きと言ってます。

死後に裁きを受けると聞いていても、裁きの内容やその様子について、聖書であまり解説されたことがないので、今日は白い御座の裁きについて解説します。

黙示録 20 章

11 また私は、大きな白い御座と、そこに着いておられる方を見た。地と天はその御前から逃げ去り、跡形もなくなった。

今から語るのは世界の終末預言ではなく、個人的終末預言です。

1年に正月があって大晦日があって、人間に誕生があって死ぬ日があるように、世界にも、初めに神が天と地を創造したスタートの日と、古い天地が全部終わって新しい天地が始まる日があるんです。新しい天地の前に、最後の審判があります。

大きな白い御座。御座は裁判官が座る場所。大きなの意味は神の大なる権威。神の大なる権威に基いて開かれた最後の審判です。

僕の友人、いい人で、そこそこの中小企業に勤めてます。会社はすごくいいんです。会社はブラックじゃないんですが、直接の上司がブラックで、次々に標的を変えて行くんですね。この前まであの人、今回はこの人。

何かの拍子で彼がターゲットになって、陰湿な虐めがずっと続いて、このままでは鬱になってしまう。もう辞めようかと。

年末に岐阜の実家に戻ったら、親父さんが「おまえ、なんか疲れとるなあ。これでも食べや」とぼたん鍋、イノシシの肉ですよ。「この肉、わしが獲ったんじゃ。」親父さんは猟師もやってるんです。岐阜のゴルゴ 13。

イノシシの肉が食べたいから猟をやってるんじゃない。畑を荒らすんです。とにかくイノシシと鹿が大嫌い。アイツら許せん！私の身近にもそんな人がいるんですけど。「もう年やから手伝ってくれへんか。おまえも猟銃免許取れや。」色んな事があつたけど、最終的に猟銃免許取りました。そして、自分のライフル買って、休みの日には射撃場に行つて腕前を磨いている。

銃が使えるようになったことを会社で話した途端、パワハラ終わったそうです。気のせいかもしれない。いやいや、そうではない。なぜ今まで、侮つてナメ腐つたことをやって来たのか。「コイツはどんだけ虐めても抵抗せえへんわ」とナメられてるんです。でも、銃が使える。俺が持っていない力を持っているとなつた時、彼に対する恐れが生じたんですね。侮ることをやめた。接し方を変えた。

聖書の神について語る時、ある人たちは神への恐れがない。だから、神様のことを卑猥な冗談に使つたり、「アーメン、ソーメン、冷やソーメン」みたいな世界。それは、神の力を知らないからだと思います。

大きな白い御座。神がご自分の権威を全く隠さずに見せている御座。大きな大きな権威です。同時に、白は聖さを表します。聖書で言う聖さには、単に罪がないというだけでなく、区別するという意味があるんです。一般の裁判とは全然違う。

先ほど、オノさんがパリ誤審オリンピックのことを言ってくれたじゃないですか。僕は中学高校と柔道をやってたので、特に柔道については、もう赦されへんねん。ほんまに。斎藤が3位決定戦で負けた時には泣いて。「なんで泣くねん、オレは」みたいに思うんですが。正しい審判がされない時の怒りや悔しさ、ありますよね。

この地上では、スポーツの審判だけじゃなくて、裁判の審判でも変なのいっぱいありますよ。日本だったかアメリカだったかよく覚えてないんですけど、よその子供が自分の家のガレージの中に侵入して、停めていたオートバイのマフラーに触つて大火傷を負つたんです。そしたら何を思ったか、親が賠償請求して支払い命令が出たという裁判があつたんですよ。自分の子供じゃないんです。よその子供が勝手に不法侵入したんです。

ところが、有能な弁護士が付くと、話が変わっていくんですね。「子供って、色んな所に入り込みやすいんじゃないですか。あなたはガレージの監督者として、鍵を掛けておく管理を怠つた。子供は怪しげな所を見たら入りたくなるというのは、十分予測できたんじゃないですか。」あれよあれよという間に支払い命令が出て。それを見て、そんなバカなど。他人事やけど、なんか腹立ちますよ。

白い御座の裁きは世の中の裁判じゃない。この世の裁判は、本当は有罪のはずなの

に、有能な弁護士が法廷ゲームの中で、黒なのに白にしてしまうことがあるんです。その場合、無罪にはなるけど、人間の法廷劇場の中で無罪になっても、神の前で無罪とは限らない。人間の法廷の裁判じゃなくて、パーフェクトな神のジャッジ。

そこに着いておられる方はイエス・キリストです。

イエスは罪人の弁護士じゃないんですか。そのとおり。いかなる罪人も弁護してください。でも、その弁護が終わる時が来ます。

最後の審判では、弁護士キリストが裁判官の席に着いている。

つまり、最後の審判の場所では弁護士がいないんです。世の中のあらゆる裁判には、弁護士が付くでしょう。しかし、最後の審判には弁護士がいない。

では、だれが呼び出されるのか。

黙示録 20 章

12a また私は、死んだ人々が大きい者も小さい者も御座の前に立っているのを見た。数々の書物が開かれた。書物がもう一つ開かれたが、それはいのちの書であった。

死んだ人々は、単に肉体的に死んだというのではなく、霊的に死んでいる人たち。

神との関係が断絶状態のまま、肉体的に死んだ人たち。

罪の赦しを受け取らずに、神と断絶状態のまま亡くなった人たち。

大きい者は、この世的に見て大きな力を持っていた人たち。例えば政治力、軍事力、経済力を持っている人は色んなところに手を回して、自分が有罪判決を受けないよう根回しできてるんじゃないですか。

ロシアのプーチン、中国の習近平、北朝鮮の金正恩。何人殺したんですか。

だけど裁かれない。自分たちが支配している国の中にいる限り、だれも彼らを罪に定めることはできない。

罪に定めようとした人が罪に定められます。耳が痛いことを言った人たちが消されて行くんですよ。だから彼らは、生きている限りだれも裁かれない。大きい者だったから。しかし死後、大きい者も御座の前に立たされます。

小さい者とは誰でしょう。大きい者の反対語、つまり普通の人たちです。

私は、小さい者は子供のことでないと考えています。

聖書には、幼子が地獄に行くというのはないと思ってます。なぜなら、「だれでも幼子のようにならなければ、神の国に入ることはできない。」

神の国に入る人の特徴は幼子だと、幼子をたとえにしてキリストが語っているところがありますね。だから、ここでの小さい者は小さな子供のことでなく、名も無い罪人たちのことです。

超有名人の偉大な独裁者も、名も無い小さい者たちも、神との関係が霊的に断絶された状態で死んだら、一人残らずみな、白い御座の前に立つことになります。

立った時に2つの物（2つの書物）が証拠として検証され、裁かれます。

①数々の書物。各人が地上で行ったことを全部記録している文書です。私の友人に某県の県会議員がいます。そこの県会議員の勉強会で、**エゼキエル書 38章**やってくださいって招かれてるんですよ。そんなん聞きますか？「聞くと思うよ」とか言って。

彼は自民党なんですけど、県議会で答弁やってる時に、ヤジが飛ぶんですって。国会のヤジも酷いでしょ。「黙って聞けよ、人の話を！」と思うんですけど。横やり入ると、最初に自分が準備して言おうと思ってたことが、分からなくなってくるんですよ。そこでも立民ですよ。もう口を極めてヤジる。調子狂うんです。

ところが、そのヤジを黙らせる方法があるんですって。野党議員が汚い言葉で、答弁している政治家を罵ったとします。罵られた人は無視するのではなく、言い返すのでもなく、淡々と「今、〇〇党の△△議員が、××はチョメチョメのように言われましたが」と言うと、議事録に載るそうです。議会の公式記録にヤジ自体は載らないけど、「この議員はこういう発言をした」とヤジの内容を復唱することで、答弁の文章として議事録に載るんですよ。議事録に一度載った内容は消せないそうです。公式の文書によって黙らせる。コイツは必ずその手段を取るということが分かってから、ヤジがだいぶ減ったと言っていました。つまり、公式文書に掲載されるということは重いんですよ。

今日のこの内容はYouTubeでSDカードに、またパソコンに全部記録されてます。忘れてはならないことを、公式文書にきちっと残すことができるんですよ。人間でもその言動を動画で残せるなら、全知全能の神様は、私たちが生まれてから死ぬまでにしたことのすべてを、**数々の書物**の中に書き記すことができる。書き記してるんです。裁判というのは気分でジャッジするんじゃなく、証拠だけでジャッジします。証拠は**数々の書物**の中に書いてある。なので、それらを突き付けられた時、「知りません」と言える人はだれもいない。みんな身に覚えのあることばかり。

②書物がもう一つ開かれたが、それはいのちの書であった。**いのちの書**は、人が生まれた時に書き記される書物ですが、神と断絶状態のまま死んでしまった瞬間に、名前が消されます。旧約聖書に「神よ、どうか私の名をいのちの書から消さないでください」という祈りが出て来ます。消されるんです。断絶状態のまま死を迎えたら。

いのちの書の中に名前が無い。しかも、**数々の書物**の中の「こんなことがあった」という記録。なぜ2つの書物なのかというと、念には念を入れてるんですね。本当は念を入れたくないんですが、聖書には「2人の証言は真実である」という言葉があって、1つの証拠や1人の証言だけでは不十分。なので、神だから間違はずはないのに、2つの書物を並べて「1つには載ってない。もう1つには載っている。」「罪のリストの中には載っている。いのちの書の中には名前が無い。」2つ突き合わせる。

黙示録 20 章

12b 死んだ者たちは、これらの書物に書かれていることにしたが、自分の行いに応じてさばかれた。

死んだ者たちはみな、同じ裁きを受けるわけではありません。裁きには軽重があるんですよ。死んだらみな、同じ地獄、同じ場所に行くのではなく、自分の行いに応じてさばかれた。ヒトラーとガンジーが同じ場所に行くはずはない。全く公平なんです。

行いに応じてどういうことが考えられるのかは全く分かりません。神様の基準だから詳しくは分かりませんが、たくさん情報をもらっている人は、少ししかもらっていない人よりも重くなるんじゃないですか。

「高原さんのYouTube全部見ましたよ！もう2回目です！」その時「大丈夫？」と。全部聞いて、福音の内容が全部分かって、それで「信じません」と言ったら、ほとんど聞く機会がなかった人よりも、はるかにマズイんじゃないですか。なんか、ちょっと脅しているように聞こえますけど、「そんなんやったら、もう来えへん！」とか、そう言わんと。私が言ってるのならカルトですよ。でも私ではなく、**黙示録 20 章 12 節**が言ってるんです。自分の行いに応じてさばかれた。

黙示録 20 章

13 海はその中にいる死者を出した。死とよみも、その中にいる死者を出した。彼らはそれぞれ自分の行いに応じてさばかれた。

裁判当日に姿をくらまして来ない奴がいますよね。今、レバノンにゴーンいるじゃないですか。日産で甘い汁チューチュー吸ったゴーン。日本の裁判所に出頭命令が出てするのに、楽器の箱の中に入って、そのままトルコ航空に乗ってレバノンまで行った。裁判に呼び出されても、欠席したらジャッジを受けないということが、世の中では起こり得るんです。

海はその中にいる死者を出した。これは、たとえ海の中でサメに食われて存在なくなっても、その死者の体はよみがえる。つまり、どこに逃げても、どこに行っても、だれも白い御座の裁きから逃れられない。

死とよみも、その中にいる死者を出した。死はここではお墓のこと。墓の中の死者の朽ちた体が復活して出て来ます。よみ（シェオール）は死者の魂が行く場所。死（墓）からは肉体、よみからは魂が出て来て合体する。つまり、最後の審判は肉体を持った状態で受けるんです。ということは、死（墓）とよみは空っぽになる。

14 それから、死とよみは火の池に投げ込まれた。これが、すなわち火の池が、第二の死である。

第一の死は肉体と魂が分かれること、離れ離れになることです。
死はギリシア語でサナトス。バラバラになる、分離という意味です。
第二の死は肉体と魂がまた合体している状態で、今度は神と永久に別れる。
その苦しみを火の池で表現したんですね。

火の池は、実際に火が燃えている拷問部屋みたいなものではありません。
苦しみを表すための詩的表現です。「いつも字義通りって言うてるやん。こん時だけ、字義通りちゃうんか！」そうじゃないです。
ある箇所では外の暗闇と書いてある。第二の死は暗黒の暗闇の世界。
火の池なら明るいやん。つまり、苦しみを与える。火の池にどっぷり浸かったら、全身苦しいんじゃないですか。

どんな苦しみかという、おそらくは後悔の苦しみ。
ここに入って行く人は、神を見た上で神の無い世界に入った。
神がどこにも見当たらない世界に行った。

神は恵み深い神。恵み深い神が見当たらない世界は、恵みがどこにも無い世界。
神は赦しの神。赦しの神がいない世界は、赦しがどこを探しても無い世界。
神は愛の神。しかも、あり余る愛。その愛を分かち合う相手として私たちを創ったのに、愛の神をどこにも見出せない。愛がどこにも無い。
「あの神を、私は捨てたのか！」その悔しさ、後悔もその中にあると思います。

15 いのちの書に記されていない者はみな、火の池に投げ込まれた。

誰もそんなところに行きたくない。だけど、一番行きたくないと思っている人よりも、行かせたくないというキリストの思いの方が強いんですよ。
一度死ぬことと死後に裁きを受けること。キリストは死後に裁きが控えていることをご存知なので、私たちを何としても救いたいと願ってくださったんですね。

ヘブル人への手紙 9 章

27 そして、人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっているように、

定まっていること ①人間は一度死ぬ。
定まっていること ②死後に裁きを受ける。

28 キリストも、多くの人の罪を負うために一度ご自分を献げ、二度目には、罪を負うためではなく、ご自分を待ち望んでいる人々の救いのために現れてくださいます。

定まっていること ③キリストも、多くの人の罪を負うために一度ご自分を献げた。
キリストが十字架にかかる前日、弟子たちを見渡して、もう愛おしくなったんですね。彼らの前で身を屈め、上着を脱いで、手拭いを腰にまとい、たらいに水

を入れて、彼らの足を1本1本きれいに洗ってあげました。これは奴隷の仕事です。弟子たちの足がきれいになればなるほど、キリストのたらいの水は真っ黒になり、手拭いはますます汚れていく。弟子たちが清くなるのと引き換えに、キリストの持ち物がどんどん汚れていく。それをヨハネは見たんです。その直後、翌日にキリストは十字架にかかりました。

イエスの十字架というと、ペンダントや聖画などで神々しい姿を思い浮かべることが多いと思いますが、実際の十字架のイエスは恐ろしい姿です。たくさんの人に唾をかけられてベタベタ。鞭打ちで傷口から血が噴き出している。両手足は十字架に釘付けられて、自分の体重でぶら下がっている。おそらく糞尿垂れ流し。血、痰、唾と尿や大便で、醜く汚らしく臭い。おぞましい。

でもその直前に、ヨハネは見たんですね。弟子たちの足がきれいになればなるほど、キリストの手拭いと水が真っ黒に変わっていった。

そのように、今キリストがここまで汚されて、ここまで惨めになって、ここまで苦しんでいるのは、私の罪を一切合切全部取り除いて、引き受けてくださっているからだ。キリストは私の罪をご自分に乗り移らせるようにして、多くの人の罪を負うために、自分自身を一度十字架に献げてくださった。そして、私の罪の身代わりとなって死んでくださった。人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっているように、キリストも一度ご自分を献げてくださった。

人が、自分の罪の結果死ぬことと死後に裁きを受けるのは、選択の余地がない。しかし、キリストが多くの人の罪を負って十字架にかかるというのは、選択の余地があったことなんです。「かかりたくない」と決心して、かからない道もあった。イエスは、十字架にかからなければならないという義務は負っていませんでした。だけど、聖書預言に「キリストは、私たちの罪の身代わりとなって死んでくださる」という約束がある。その約束を実行してくださったという意味で定まっていたんです。

約束を守り抜く秘訣は何かについて、「守れない約束はしないことです」と書いてありました。約束する時、自分のスキルと実力を考えて、自分が守れそうな約束なのかと。守れそうにないのに、リップサービス的に勢いで「よし！まかすとけ！」って言って、アカンこと、あるじゃないですか。後で「なんで引き受けてん…」僕、毎日そんなんですよ。「なんで引き受けてん…」ブツブツ言いながら。

神の約束は神が実行できる範囲内のこと。では、神の実力はどれくらいですか。全能。全知全能。無制限の能力。だから、いかなる約束でも神は果たされる。人に死と死後の裁きが定まっているように、イエスは神の約束のゆえに、自分を十字架に付けようと、ご自分で定められたんです。それで、私たちの罪が永久の彼方に持って行かれました。

定まっていること ④二度目には、罪を負うためではなく、ご自分を待ち望んでいる人々の救いのために現れてくださいます。

一度目は、イエスが処女マリアから赤ちゃんとして生まれたこと。

二度目は、キリストはまた来るとのこと。

二度目には、罪を負うためではなく、ご自分を待ち望んでいる人々（イエスを救い主と信じた人々）の救いのために現れてくださいます。

ここでの救いは、この世界からの救いです。地上からクリスチャンを全員引っ張り上げてくださる。携挙。携え挙げる。そのために、キリストは再び来てくださる。将来確実に起こることとして、この約束はあるんですね。

携挙するために天から下りて来られるということは、十字架にかかって死んで終わりではなく、三日目に復活して天に昇られたので、天からまた下りて来られる。つまり、再び来てくださるということは、一度死んだきりではなく、「死んだ後三日目に復活した」という歴史的事実に立脚しているんですよ。

復活してオリーブ山から天に昇って行った方は、世の終わりに、クリスチャンたちを迎えに再び来てくださる。クリスチャンたちはそれを待ち望んでいるんです。

『雨降り』という童謡がありますね。「♪雨、雨、降れ降れ、母さんが、じゃのめでお迎え嬉しいな。ピッチピッチ、チャップチャップ、ランラン♪」

じゃのめって、子供の時、聞いて分かりました？「じゃのめでお迎え嬉しいな。」ある時母に聞きました。「じゃのめってナニ？」「じゃのめってな、へびの目と書いて蛇の目や。」「蛇の目か…。へびの目玉に乗って来るお母さんって怖いな。」蛇の目でお迎え、嬉しいか？怖いやろ。そういう歌詞の勘違い、ありませんか。

『巨人の星』の「♪おもいこんだら、試練の道を♪」

私、その歌の画面を見ながら、星飛雄馬がグランドを大きな重いローラーかけているという…。後で調べたら、そうじゃなかったです。

蛇の目って和傘のことです。洋傘じゃなくて、和紙で作った蛇の目傘。

きれいな色で真ん中に丸があって、開いた時にへびの目ん玉みたいに見えるから、蛇の目と言われるようになったそうですが。

普通は、雨が降ったら「今日天気悪いな。」晴れたら「今日天気いいよね。」

ところが、この子は雨が降っているのにワクワクしている。

雨が降ったら、お母さんが蛇の目で迎えに来てくれるから。

「♪雨雨、降れ降れ、もっと降れ♪」いやいや、危ないところでした。

ちょっと、八代亜紀に足を踏み入れてしまいそうになったんですけど。

嫌な天気なんだけど、嫌なマイナス面を補って有り余る、もっと良いものが来る。お母さんが直々に迎えに来てくれる！

「ピッチピッチ、チャップチャップ、ランラン♪」ってリズムカルですね。

日本の童謡ってこんなにリズムカル。「ピンチピンチ、チャンスチャンス、ランラン♪」にも聞こえるし、なんかイイじゃないですか。

『雨降り』は5番まであります。2番3番4番の内容は、お母さんと蛇の目傘2つで帰ってたら、途中で、傘がなくてずぶ濡れの子がいるんですよ。あまりの豪雨でその子は泣いてる。お母さんに「母さん、僕の蛇の目、この子に貸してあげてもいい?」「いいわよ。」貸すんです。

5番は「♪僕ならいいんだ。母さんの、大きな蛇の目に入ってく♪」なんで貸してあげるかということ、大好きなお母さんともっと近くになって、一つの大きな蛇の目傘の中で守られて行くから。

クリスチャンも世の終わりになればなるほど、色んな試練というか、大雨、台風、集中豪雨みたいなことが、世界にも人生にも起こります。そうなればなるほど、「終末時代のしるしじゃないか！イエスはまた来られる！」「見よ。私は世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいる」と約束してくださった方が、クリスチャンたちをこの世界から救い出すために再び来てくださる！

再臨や携拳のことを考える時、「ピッチピッチ、チャップチャップ、ランラン♪」って言いたくなるようなね。雨が降らない状態の時じゃないんです。雨が降らないと来ないんです、母さんは。雨が降れば降るほど、それは嫌なことじゃなく、「これは携拳の前兆じゃないか」と希望になっていくんですね。

ヘブル人の手紙は、ヘブル人（ユダヤ人）でイエスを信じた人たちを励ますために語っています。つまり、彼らはイエス・キリストを信じたんです。だれでもイエス・キリストを信じるならば、もしかしたら、一度死ぬことも変更できるかもしれません。「えっ！死なないの？」携拳の時に生き残っている人は、死なずに天国に行きます。

確実に言えることは、**死後に裁きを受ける**という結末を変えることができるんです。これが、「運命」と聖書が語っている「預言」の違いです。運命論というのは、もう定まっています。もうどうしようもできないんですよ。

数年前に、結婚式に招かれてメッセージをしました。全部終わって早目に帰ろうとしていたら、多分新婦さんの友達だと思いましたが追いかけて来て、その時言ってくださった言葉を忘れることができません。「神父様！」って。「えっ！誰が？俺、神父ちゃうし。」でも、結婚式で話すのは神父さんやと思てはるんですよ。もう言わせとこうと思って「はあ、どうも…。」急いでるから、説明したら長なるんでね。

「神父様がおっしゃったキリストのありがたいおことばを要約すると、私が運命の人を探すのではなく、私がだれかの運命の人になれるように自らを高めていく。

そのためには、キリスト様のお恵みが必要だということによろしいでしょうか。」
よう聞いてんなあ。ところどころ、ちょっとちゃうけど。まず神父が全然ちゃう。

クリスチャンは「運命の人」という言い方はしません。「導かれた人」。
クリスチャンは運命を信じているのではなく、神を信じてるんです。
運命とは、自分が生まれる前から決まっていること。生きている間の幸せや不幸、
巡り合わせが前から決まっいて、そういう運命だったという。
そして、運命には基本的に人格がありません。

しかし、神は人格をお持ちの方です。その神は「このまま行けばこうだけど、悔い
改めて救い主を受け入れるならこうなる。」
生き方を転換させるために、聖書預言があるんですね。

キリストを信じ受け入れるなら、キリストは喜んで永遠のいのちを与え、この地上
ではキリストご自身が私をエスコートし、携挙で引き上げてくださいます。
これが福音です。
ぜひイエス・キリストを信じてください。心からお勧めします。

------*---*---*---*---*---*---*---*---*---*---*---*---*---*---*

引用文献；新日本聖書刊行会『聖書 新改訳 2017』いのちのことば社,2017